

ミュージカルバラエティ

稲ムラの火

原作 石塚克彦 構成・演出 天城美枝

『稲むらの火』は1854年安政の南海地震に際して、復興に挑んだ浜口梧陵と村人たちの実話に基づく物語です。

浜口梧陵は紀州広村で分家浜口七右衛門の長男として生まれ、12歳の時に本家の養子として、銚子（現在の千葉県）に移り、家業である醤油製造販売・広屋（現・ヤマサ醤油）の事業を継ぎました。

たまたま彼が広村に帰郷していた時、突如大地震が発生し、紀伊半島一帯を大津波が襲いました。

彼は稲むら（稲束を積み重ねたもの）に火を放ち、

この火を目印に村人を誘導して、彼らを安全な場所に避難させました。それでも津波により村には大きな爪あとが残りました。

かわり果てた光景を目にした梧陵は、故郷の復興のため身を粉にして働き、被災者用の小屋の建設、農機具・漁業道具の配給をはじめ、各方面において復旧作業にあたりました。

さらに将来のための津波対策と、災害で職を失った人たちの失業対策のために、紀州藩の許可を取って堤防の建設に着手し、翌年から4年の歳月、延べ人員56、736人、銀

94貫を費やして全長650m、幅20m、高さ5mの大防波堤「広村堤防」を築きました。

そしてこの堤防は1946年（昭和21年）に発生した昭和の南海地震津波から住民を守り抜きました。

浜口梧陵の行いに感動した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、A Living God（生ける神）として全世界に紹介されました。

又、昭和12年文部省発行、小学国語読本に「稲むらの火」として掲載されました。

その物語をミュージカルカンパニーふるきやらが舞台化したのが、バラエティ「稲ムラの火」です。

